

白川静のことば

《25》



金子都美絵・画

神の声を聞くことを聴という。聴の旧字形である聽の左偏は聞の初形であり、聖の省略形である。聖の字形から祝詞の器の形である^レを除いたもので、^旁には徳の省略形、その偏を除いた形を加える。すなわち聴は、神の声を聞きうるような徳あるもの、その声を聞きうる能力のあることをいう字である。そのような徳あるものにして、はじめて神の声に接することができる。それは神の声を聞くことを「^聴され」たるものである。それで聴はまた聴許の意となる。本来は、神が聞きとどけることをいう字であった。そのように神の声を聴き、また神聴に達しうるものは、人の世では聖なるものであり、聖者としての徳をもつものであった。

神はもと姿なきものであり、声なきものであり、感性ではとらえがたいものである。「詩、大雅、文王」篇に、「上天の載は 聲も無く臭も無し」と、人の感性を絶するものであることを歌う。すでに姿のないものであるとすれば、声と臭とのほかに感知の方法はない。その声も臭もないものを、ただ聖者のみはこれを感知することができた。「聞く」とは、その声と臭とを感知することをいう語である。

『文字遣遣』平凡社ライブラリー P173-174)

